

〈論文〉

秩序と進歩、そして愛のゆくえ

—— ラテンアメリカのコント実証主義の二大展開と意義 ——

東洋英和女学院大学 三橋 利光

◆序

19世紀後半から20世紀初頭にかけてラテンアメリカのほぼ全域に絶大な影響を及ぼしたといわれる実証主義については、これまで多くの研究が積み重ねられてきてはいるものの、実はその多方面にわたる影響は十分には解明されておらず、われわれがその全貌を把握できるのはまだこれから先のことであるようだ。しかしここで話を進める前に、読者のなかには、そのようなことにこだわる意味はあるのか、という素朴な疑問の声をあげる方がいられるかもしれない。そのような疑問に対しては、当時の社会のありようや特徴をよりよく理解するために、換言すれば、当時の社会や人びとが何を望んでいたか（いうなれば時代の要請）をよりよく理解するために大事なことだろう、とまずはお答えしておきたい。さらに実証主義がそれほどのインパクトをラテンアメリカ社会全体に与えたのであれば、それ自体を可能なかぎり究明しようとする努力は価値があるだろうし、またそれは必要なことでもあろう。

実は筆者はラテンアメリカの実証主義に関する研究には、ややもすると混乱が

..... * *

*本稿は、上智大学および同イベロアメリカ研究所共催によるラテンアメリカ事情講座シリーズ第7回「ラテンアメリカの知性 — 歴史を変えた人々 —」の一環として、1993年6月30日（水）に上智大学四ッ谷キャンパス内で筆者が発表したテーマ「ラテンアメリカの実証主義の展開」をもとに執筆したものである。

見られるのではないかとかねがね感じてきた者である。その混乱の主要な要因としては、以下のふたつが考えられる。第1に、そもそも実証主義を最初に唱えたコント思想に対する解釈にしてからが、ラテンアメリカはおろか、フランスを含めた他の地域においてもまちまちであった点である。第2に、ラテンアメリカの実証主義という場合、オーギュスト・コント (Auguste Comte : 1798-1854) の思想ばかりでなく、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer : 1820-1903) の進化論的自然主義と社会ダーウィニズム、また、ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill : 1806-1873) の功利主義、帰納法論理をも含めて言及される場合があり、同じ「実証主義」という名称でも、内容が微妙にずれるか、あるいはまったく異なる意味で使われてきた点である。このふたつが主要要因と考えられるということは、有り体にいうならば、ラテンアメリカにおける実証主義に関するこれまでの研究においては、どちらにせよ結局のところ、おのおのの内容が十分に検討されないままに、ラテンアメリカでのその「展開現象」に対してのみ圧倒的な比重が置かれてきたことを物語るものではあるまいか。つまり基礎的作業がおろそかにされていたがために、それぞれの実証主義が当時のラテンアメリカでなぜそれほど的重要性をもったのか、をいまひとつ明確につかめないでいるのではないだろうか。また実証主義が現代のラテンアメリカの一部に影を落としているように感じられながらも、同じ理由によりその実態がなんであるのかを確実に把握できないままにしているのではないだろうか。

本稿では、ラテンアメリカの実証主義に関する解釈上の混乱をときほぐすためのささやかな試みとして、上記ふたつの混乱要因のうち第1の点に、すなわちコント実証主義に限定して、①コント実証主義の内容を大雑把に検討したのちに、②それがラテンアメリカでどのような展開を示したのかをブラジルの例をとって考察する。そのねらいは、コント実証主義が当時のラテンアメリカ社会にもたらした意義と限界を大筋として明らかにすることにある。またコント思想の現代的意味に、少しでも光をあてることができれば、とも願うのである。

1. コント実証主義とは

コント実証主義それ自体については、紙幅の制限もあるので、以下の4つの項目別に筆者の大まかな検討と解釈を述べるにとどめたい。それはコント実証主義の基礎的な整理でもあろう。

1. コントの代表作とコントの発見

周知のようにオーギュスト・コントは19世紀前半の思想家・哲学者であり、「社会学」(la sociologie)の創始者である。その代表的著作としては、①初期の思想的萌芽が見られる『社会再組織に必要な科学的作業の概要(プラン)』(1822:Prospectus des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société)、②前期の『実証哲学講義』全6巻(1830-42:Cours de philosophie positive, Tomes I-VI)、③後期の『実証政治学体系』全4巻(1851-54:Systèmes de politique positive, Tomes I-IV)の3点をあげるのが適当だろう。

コント実証主義といわれるものは、コントの2つの発見、ないしは定式化に基づいている(本稿ではコントに影響を与えたコンドルセやサン・シモンなどと、コント思想の類似性・独自性との関連には立ち入らない)。そのひとつは「諸科学の分類」であり、普遍性を獲得した科学こそ実証的状态に達したということができ、その状態になってはじめて証明ができるというものである。実証的状态に達した科学を時期的に早いものから、数学・天文学・物理学・化学・生物学・社会学という順にコントは詳しい説明をほどこし、それらすべてを社会学を頂点とする階梯のもとに統合したのである。また「実証的」という用語についてコントは、現実的・効用性・確実性・正確さ・組織的・相対的という属性を指摘する。⁽¹⁾

他のひとつは「3状態の法則」であり、人類の文明(社会)の進行は一定の方向を辿っているという考え方を前提として、人類史を3つの発展状態に区分したものである。それは、①神学的・軍事的状態、②形而上学的・封建的状态、③実証的・産業的状态の3つであり、コントはきたるべき社会は③実証的・産業的状态であるとして、それは同時に平和な社会であることを想定したのである。大雑把に捉えるならばコント実証主義の内容は上記2つにまとめられるのだが、以下の項目のもとでそれらをより詳しく見てみよう。

2. コントの時代とコントの問題意識

コントの生きた19世紀初頭は、フランス革命という破壊の時代の終焉後、西欧社会の新たな建設をいかに達成するかが課題であった。つまり、外的環境として「産業社会」が到来しつつあるとの差し迫った認識のもとで、破壊(革命)によってではなく、平和的手段により、新しい世界像、世界秩序をどのように構築す

るかが当時の知識人の共通の関心事だったのである。さらにコントは時代の潮流のなかに、個人主義・個人の権威への傾向を感知し、それを未来社会の建設には好ましくない要素として捉えていた。要するにコントは、新しい社会の建設のためには、道徳（モラル）の刷新こそが急務である、との確信を抱き、それをいわば出発点として、実証主義社会の建設を目指したといえよう。

しかしその社会の実現方法において何を重点に置くかに関しては、【前期コント】（先の代表作の②に該当する）と【後期コント】（先の代表作の③に該当する）とでは、かなり様相が異なるのである。つまり【前期コント】においては、科学が重視され、秩序（社会静学）・進歩（社会動学）を基軸として社会の再建が目指されていたのであった。また【後期コント】に移行する前に、コントはクロチルド・ド・ヴォー（Clotilde de Vaux）夫人との出会いがあり、それが契機となって「人類教」という人工宗教を創設した。そしてそれを基盤とした【後期コント】においては、情動が重視され、秩序と進歩の概念を踏まえながらも、大枠としては「人類愛」の原則によって、社会の再建が目指されたといえるのである。ここで【前期コント】においては科学が重視され、【後期コント】においては、人類教のもとで情動が重視されたという点はとくに重要である。なぜなら、ヨーロッパにおいてもまたラテンアメリカにおいても、【前期コント】の思想は受け入れるが、【後期コント】の人類教は受け入れない、という人びとが多かったからである。そしてラテンアメリカにおけるコント実証主義の受容と展開も、前期・後期のふたつの重点の置き方の異なるコント思想のどちらをとるかという違いによって、主としてふたつの形態に大別できると考えられるのである。

3. コントの政治・社会改革のための基本方針

コントの主要著作から抽出できるコント実証主義による政治・社会改革のプログラムの基本方針は、具体的には以下のような内容をもつといえよう。

- (1) 中世に習って、政教分離を強調する（一時的権力と精神権の分離）。
- (2) 基本的に保守主義である。
- (3) 「独裁共和制」を指向するが、同時に表現の完全な自由を保障する。
- (4) 議会制民主主義に反対の立場をとる。
- (5) 過度の知性主義に批判的であり、大学制度は不要なものとして廃止を主張する。
- (6) 個人の権利よりは義務を強調する。

(7) 集団生活を重視する。

(8) 世代間の継続を重視する。

(9) 「社会優越体制」(la sociocratie)を志向する。

つまり人びとの道徳の刷新こそ新しい社会の建設のための第1の課題と考えたコントは、個人の自由は保障しながらも、個人主義の行きすぎに警戒感を抱いて、その克服にこそ新しい社会秩序の根本原理を見いだした、と解釈できるのである。こうしてその方法は、全体主義的な色彩をも合わせもつものとなった。しかし後期コント思想においては、それは同時に個人の幸福に関する深い省察とも結びついていたのである。

4. 後期コント思想(人類教)の特徴

後期コント思想の中心概念は、その標語「愛を原則とし、秩序を基礎とし、進歩を目的とする」に要約されている。そして個人の道徳のレベルでは、①利己主義から愛他主義への方向へ、また②個人性から社会性の方向へと、個人の志向するところを徐々に替えていくことが要請される。それというのもコントは、人間の利己主義のなかに不幸の源泉を見たからであり、また反対に人間の幸福は、人間の持つ寛大な傾向をできるだけ発揮することにあると考えたからである。さらにコントは、すでに述べたように、①人類の歩みの歴史的時間軸を、過去から、現在、未来へと連綿と続くものとして捉え、また、②空間的広がりとして、個人→家族→祖国→人類社会という図式化を構想することにより、「愛他主義」および「社会性」を個人の次元から人類社会への次元へと広げることを目指したのである。つまり後期コント思想(人類教)は、個人の幸福と人類社会の望ましいあり方に関して、徹底的な問い直しを図り、ひとつの回答を示したものと見えるのである。このように人類教は、コント思想の到達(点)と見ることが可能であろう。

以上のコント実証主義の検討により、その特徴のいくつかを重複を恐れずに手短かにまとめると、①人類社会の進歩を科学の装いのもとに提示したもの、②未来社会の建設を目指す、③革命ではなく平和的手段による、④保守主義を掲げ、秩序を重視する、⑤「人類愛」を標榜する、などを指摘することができよう。このうち【前期コント実証主義】は①・②・③・④を含み、【後期コント実証主義】にはそれらに加えて、さらに⑤が含まれるといえよう。つまりきわめて大雑把に単純化すれば、【後期コント実証主義】は人類教を中心としたコント思想のすべ

てを、また【前期コント実証主義】は、人類教を除外したコント思想に言及しているといえるのである。

Ⅱ．19世紀後半のラテンアメリカ実証主義の受容基盤としての政治・社会状況

ここで、コントが生きていた時代からは、やや下った19世紀の後半以降のラテンアメリカ社会で実証主義がかなり広範囲に受け入れられたということの背景には、当時のラテンアメリカの政治・社会状況それ自体が、実証主義の受け皿を提供していたのではないかと推察するのは自然なことだろう。そこでこの時期の社会・政治状況を大雑把に整理しておきたい。極度の単純化は危険ではあるが、大局的な歴史把握のためにはそれが必要な場合もあろう。

19世紀前半のラテンアメリカでは、各国により違いはあるとはいえ、おおむね長かった植民地時代を清算し、政治的には独立したものの、多くの国々では混乱状況が続いていた。それがようやく19世紀半ばごろになると政治制度が、まがりなりにも確立するようになったのである（たとえば政治制度として大統領制、議会制、また憲法の公布など）。

こうして19世紀の後半には、独立国としての安定化・近代化が各政府にとって緊急課題となった。具体的には国内統合、教育の普及、経済発展と道徳の確立などが目指されたのである。その際、北ヨーロッパにおける産業革命による近代化の成功がモデルとなった。しかしラテンアメリカ各国の指導者たちは、自分たちの遅れによる劣等感を克服する必要があった。とくに北米の繁栄に比べると、ラテンアメリカはいまだ混沌状況にあるのも同然だった。同時に政治エリートたちは、精神的な自立をも求め、旧宗主国であったスペイン・ポルトガルとは距離を置こうとしたのである。またこの頃になるとようやく中間階級が台頭し始め、社会・政治改革への意識が高まっていった。それは19世紀前半からの自由主義の流れと結びついていた。こうして近代国家としての体制を整え、スペインやポルトガルからは距離を置いて自立意識と自信をもち、かつ北ヨーロッパのように発展することが、当時のラテンアメリカの時代的要請であったといえるのである。また流行や文化面ではラテンアメリカのエリートたちは一斉にフランスを向き、その文化的香りを吸収するのに躍起になっていた、というのがその頃の時代風潮であったといえよう。

こうしてみると、ラテンアメリカの近代化の要請という当時の時代背景が、コ

ント実証主義の受容基盤となっていた、と大雑把にまとめることができると思われるのである。

Ⅲ．ブラジルにおける実証主義の展開

それではラテンアメリカにおける実証主義について、ふたつの異なる展開を示した典型的な例としてブラジルの場合を取り上げて、その概略を検討してみる。⁽⁴⁾

1．歴史的背景

周知のようにブラジルは独立後も君主制を維持してきたが、19世紀の後半の1888年になってようやく奴隷制を廃止し、その翌年の1889年に連邦共和制が樹立され、同時に大統領制がしかれた。ほどなくしてブラジル国旗が制定され、1890年には信教の自由が宣言され、翌1891年には共和国第一憲法が公布され、近代国家としての体裁が次第に整うようになっていった。20世紀に入ると、ブラジルは近隣諸国との国境を次々と画定し、こうして19世紀末から20世紀初頭にかけてのブラジルは、いわば一大激変期であり、上からの（政府主導の）近代化を強力に推進した時代として理解できよう。共和制樹立後の初期には、大統領は軍人によって占めていたが、その後1890年代の半ばごろからは、民間出身の大統領が4年の任期ごとに交替するようになり、ブラジルの民主制度も形式的には定着していった。しかしその間、軍部内の反乱や、海軍の反乱、カヌードスの反乱などが起こった。

しかし世紀が転換し20世紀になると、リオデジャネイロの町並みは首都大整備計画のもとに美しく変貌し、パリの最新ファッションや英国紳士の身だしなみに関する情報がこと細かに週刊誌に紹介され、上流・中間階級のカリオカたちは競ってその真似に専念したという。⁽⁵⁾このようにブラジル人エリートには、明らかにヨーロッパに近づきたいという強い願望があったのだが、「文明と進歩」のブラジルでの具体化は、その首都であるリオに集中したのだった。もっともこの時期の国内では、コーヒー産業の隆盛地域は、すでにリオからサンパウロへと変遷しつつあり、その他の面でもサンパウロは躍進を遂げつつあった。また共和制樹立後の世紀転換期の全体を眺めると、中間階級の台頭と、その軍隊との結びつきを指摘できる。つまり威信を持つ軍隊は、中間階級の社会的上昇の場として、また中間階級の声を代弁する機関としての役割を果たしたのだった。⁽⁶⁾

2. 共和主義、連邦主義と実証主義

コント実証主義は、ブラジルにおいても多方面への影響が見られたが、その歴史上、重要な役割を担ったと考えられるのは、なんとといっても第二帝政から共和制への移行の際とその直後の初期共和制においてであろう。ここにひとりの人物、ベンジャミン・コンスタン (Benjamin Constant Botelho de Magalhães : 1833-1891) が登場する。すでに第二帝政末期の1886年には「軍事クラブ」が結成されて、軍隊の利益や不満を表明する場を持つようになった。また陸軍士官学校で教鞭をとっていたベンジャミン・コンスタンはコント実証主義に共鳴し、そこでの青年たちにコント実証主義を吹き込んでいたのである。それは秩序と進歩に象徴され、また共和主義と科学主義に彩られた社会再建の思想として紹介された。こうしてコンスタンがそこにいたがゆえに陸軍士官学校はブラジル実証主義のひとつの中心地とみなされるようになったのであるが、そこにはコンスタンを含めて少なくとも10人の教授が実証主義の指導者であった。⁽⁷⁾ 帝政の崩壊の背景は単純ではないという説もあるが、少なくともその一要因としては軍部の君主制に対する批判と不満があった、とはいえよう。また当時は共和党が共和主義イデオロギーを宣伝して軍の不満を利用しようとする動きも見られた。さらに共和党には民主主義者と実証主義者がいた。⁽⁸⁾ いずれにせよ軍隊は実証主義と、それが包摂している共和主義の思想に染められていた。⁽⁹⁾ こうした背景のもとでコンスタンが「軍事クラブ」の初代会長であったデオドロ・ダ・フォンセカ (Deodoro da Fonseca : 1823-1892) 将軍を説得して、共和主義運動に組み込むことに成功すると、陸軍は俄然、共和主義運動の熱烈な支持にまわり、平和裡にクーデターが敢行されて、帝政はあっけなく崩壊して、共和制が樹立されたのである。このようにコンスタンを中心とした若いコント実証主義者たちは帝国を崩壊に導いた頭脳集団であったといえることができる。また共和制樹立後の憲法制定会議には若い将校たちが参加しており、彼らは全員実証主義者で、権威主義体制に賛成であったため、議会制ではなく大統領制が採用されたのである。またコンスタンはその後陸軍大臣に任命された後、文部大臣になり、コント実証主義に基づいて多くの教育改革を実行したのであった。

コント実証主義のブラジルでのもうひとつの際立つ影響は、南部リオグランデドスル州における連邦主義に及ぼされたものである。ここでもひとりの人物が関係する。ジュリオ・デ・カスティーリョス (Júlio de Castilhos : 1860-1903)

である。カスティーリョスは、コントの晩年の著作であった『保守主義者への訴え』⁽¹⁰⁾を徹底的に学び、それに深く傾倒していた⁽¹¹⁾。1891年2月に共和国憲法が公布されたのちの同年7月14日には、カスティーリョスが起草したリオグランデドスル州憲法がコントのモットーのひとつである家族、祖国、人類の名において公布されたのである。この州憲法は、コント実証主義を色濃く反映しており、「政教分離と、近代政治原則すなわち科学に基づいた政治原則に則って、宗教の自由、職業の自由、産業の自由が完全に保障される」⁽¹²⁾と宣言し、さらに次のような条項を明記している。①州議会は単一制であり、それは財務関係のみを扱う、②執行部は5年の任期で、市町村の評議会の多数が反対しないかぎり、政令により法律を制定する、③州知事は副州知事を任命する、④州知事は、各選挙の際、4分の3以上の賛成があれば、無限に再選されうる⁽¹³⁾。このようにリオグランデドスル州憲法は権威主義的な性格を宿していたが、それは1930年のヴァルガス革命まで存続し、リオグランデドスルの連邦主義を支えたものといえよう。

こうしてみると、上記2つの例からはコント実証主義は、人類教を排除した、いうなれば「秩序と進歩」の近代主義・科学主義に代表される前期思想こそが、中央・地方の政治や教育、また憲法条項などに影響を与えた、との結論を導き出してもよいのではないかとの誘惑にかられるだろう。しかし実際には、事はそれほど単純ではないようだ。コンスタンは人類教に少なくとも初期には帰依していたし、またそれと決別するようになって自ら政治の世界に入ったのちも、その行動がコント実証主義の教義には反するところがあったとはいえ、最晩年には自分が常にコントの完全な（つまり人類教を含めたすべての思想を受け入れる）実証主義者であったことを告白している⁽¹⁴⁾のである。さらにカスティーリョスも人類教を受け入れてはいなかったとはいえ、人類教を含めたコント実証主義を尊敬していた⁽¹⁵⁾という。また先にも見たように、カスティーリョスはコントの晩年の著作『保守主義者への訴え』に深く影響されたのであった。

このようにコント実証主義は、一方では、上からの近代化を強力に推し進めるための理論として、主として中間階級によってブラジルで採用され、それは現実の社会・政治的改革の上で決定的な意味をもったといえるとともに、コント実証主義のもうひとつの側面である人類教が意外にも、こうした改革をリードしたエリートたちに影を落としていたことをわれわれは垣間見ることができたのではあるまいか。

3. ブラジル実証主義者教会

コント実証主義の影響がとりわけブラジルにおいて著しかったといわれるのは、「ブラジル実証主義者教会」が1881年の設立以来、コントの人類教を奉じる「教会」として通常の教会活動をしてきたばかりでなく、近代化に邁進していたブラジルの政治・社会の動きにたいして徹頭徹尾コント実証主義に則って、果敢な発言と活動を続けてきたからでもあろう。コントに完全に忠実であるというその「正統主義」の立場は、フランスにおいても見られなかったほどに徹底しており、それが現在に至ってもなお存続しているという事実は驚異でさえある。

「ブラジル実証主義者教会」は、それまでリオを中心とした実証主義者グループのクラブを何回かにわたって組織変更したのちに再編されたもので、初期にはパリのピエール・ラフィットの指導のもとにあった。それはリオデジャネイロ理工科大学の学生であったミゲル・レモス (Miguel Lemos : 1854-1917) とテイシェイラ・メンデス (Raymundo Teixeira Mendes : 1855-1927) とが、フランス留学を機に後期コント実証主義に触れ、それにつよく共鳴して、1881年にレモスが帰国して以来、レモスがその会長を、メンデスが副会長を務めて、ブラジルのコント実証主義の普及に貢献したのである。

その対外的活動は、多くの場合、パンフレットや公開書簡、新聞、雑誌などへの論説や寄稿文、講演会などによるものであるが、当時の国内、国際的な政治・社会問題に関して、相手がだれであろうとコント実証主義の立場から、果敢な論争を挑み、ある場合には徹底的に批判したり、また時には称賛したり、またある時には注意を喚起し、さらに別の機会には啓蒙する……という具合で、その言論活動によって当時のブラジルの近代化政策の実施過程におけるその促進や軌道修正の役割を果たしたものと解釈することができる。その内容は、時の大統領の政策から、一部の実証主義者の奴隷所有の問題や、外国人犯罪人の国内での扱われ方、公共墓地の世俗化、中国人移住問題、外国との国境紛争、裁判所の非宗教化、公共教育の改革問題、薬品の自由使用について、学歴と特権問題、動物実験への批判、肉食主義について、労働者のスト権について、軍国主義、軍備拡張への警告……等々、多岐にわたるものである。⁽¹⁶⁾このような諸活動は、今風にいうならば、さしずめNGOやアムネスティ・インターナショナルを想起させるものである。つまり当時にはそのような団体が少なかったであろうから、非政府団体のボランティア・グループのような活動を、コント実証主義を基準として行なっていたのであった。

しかし「教会」は本来の使命として人類教の普及に尽くすことがあり、当然のことながらブラジル実証主義者教会は、人類教本来の教会内の行事とともに、コント自身について、その人類教について、そのおりおりに人類に貢献した人々の生涯について、講演会を催したり、小冊子として発行したりしたのである。それらについて現在残っている「教会」発行の出版物にはポルトガル語版の他にフランス語版があり、当時の「教会」が国際的にも活発な活動を展開していたことをうかがわせる。実際のところ「ブラジル実証主義者教会」は、諸外国の実証主義グループと国際的な連携関係を保っていたのであり、とくに英国のリチャード・コングレーヴ (Richard Congrève) やチリのホルヘ・ラガリーゲ (Jorge Lagarrigue) 等とは正統派実証主義者として緊密な連絡をとっていた。

しかしながら「教会」は【後期コント実証主義】つまり人類教に固執するあまりに、その活動のエネルギーの多くを、常にコントに忠実であるか否かという基準によってのみ、他の実証主義者たちを断罪したり、批判したりすることに消費してしまい、その活動からは独創的な発展は生まれてこなかったように思われる。しかもコントを後ろ盾として相手を構わず、果敢に挑戦して、社会正義のための戦いを挑む姿勢は貴重であったにせよ、現実の制度や組織上の改革にどれほどの直接的な影響力をもったかは疑問である。それというのも、実はコント実証主義それ自体のなかに、当時から現在にまでつづいたと考えられる時代潮流 — すなわち①民主化の傾向、②ある程度の個人主義の是認、③あらゆるレベルにおける平等化への（固執）傾向など — に反する要素が強烈に主張されているからである。

それにもかかわらずすでにわれわれが「Ⅰ. コント実証主義とは」でみたように、コント実証主義は、人類の未来社会の建設のために、人類愛を基軸として、また歴史的にも空間的にも壮大なシエマを提示したものであった。また本稿では検討できなかったが、コント実証主義にはこれまでの西欧の「近代化」を超える普遍性が展望されている、と筆者は見ている。ブラジル実証主義者教会が、コントにあくまでも忠実であり続けてきたのも、おそらくはブラジルの若かった指導者たちにコントのいわば「新しい普遍性」を敏感に受けとめることのできる感性のしなやかさと、また高邁な理想を貫き通すことのできる頑固さがあったからだと思われるのである。

IV. 暫定的結論

【前期】と【後期】に区別されたコント実証主義がラテンアメリカにおいてどのような展開をしたかについて、その典型例としてこれまでブラジルの事例を検討してきたが、賢明な読者には筆者の当初の意図がどのようなものであったかはすぐに理解できよう。つまりブラジルでは、【前期コント実証主義】はベンジャミン・コンスタンやジュリオ・デ・カスティーリョスなどに代表されて、「秩序と進歩」の標語のもとにブラジルの近代化の道具として利用され、他方【後期コント実証主義】すなわち人類教は、「ブラジル実証主義者教会」に確実に継承された、というふたつの明確に異なる展開図式である。さらに【前期コント実証主義】は国内のさまざまな面での近代化に影響を与えたのに対して、人類教はブラジル実証主義者教会の精力的な活動にもかかわらず実際的な影響力は軽微なものにとどまる、という対称的な構図である。そしてこの見方は大局において正しいといえるのではないだろうか。

しかしながら検討の過程で、われわれはベンジャミン・コンスタンにおいてもジュリオ・デ・カスティーリョスにおいても、人類教が微妙に影を落としていることを見たのだった。そして人類教すなわち【後期コント実証主義】には筆者のいう「新しい普遍性」が包含されており、それに敏感に呼応したのがブラジル実証主義者教会のふたりの若い指導者であった、という仮説を提示した。もしもこの仮説が正しいとすれば、それはさらに他のブラジル人にも広げることができるだろう。つまり【後期コント実証主義】になんらかの影響やこだわりを抱いたブラジル人は、それがもつ「新しい普遍性」に惹かれていたためである、という解釈も成立しえよう。しかしそれは検証が難しい。しかしさらに普遍性への志向は、ラテンアメリカにおいてもとくにブラジル人において顕著な傾向であったからこそ、「正統派コント実証主義」があれほど根強くブラジル社会で活躍できたのではないか、という仮説もまた自然に生まれるのである。

以上を整理すると、ブラジルの事例からラテンアメリカのコント実証主義の展開は、大きくは次のようにまとめられよう。①【前期コント実証主義】は「秩序と進歩」を旗印として、ラテンアメリカの政治システムを正当化する働きをもち、上からの（政府主導の）近代化に理論的根拠を与え、支配エリートに威信を与えたといえよう。同時に台頭してきた中間階級の利益代弁の理論としても使われた。②【後期コント実証主義】は、ラテンアメリカの一部の人々の普遍志向に合致し、

その集団の一徹さにより、現実離れした（時代潮流とはかかわりなく）政策や提言に表現されたが、それらは上からの近代化を多少促進したり、抑制したりするという補助的な役割にとどまり、その直接的な影響は軽微であった。③①と②のあいだには、人類教の影響をいくらかでも受けながら、それを公言はせずに①の枠内での役割に徹した人びとがいる。この③の立場は微妙であり、その程度の差は個々により大きく異なるだろう。いずれにせよコント実証主義は、この時代のラテンアメリカ人のアイデンティティの確立と自己発展のための端緒となったことは理解されたはずである。

またコント実証主義は、他の思想潮流と結びついて新たな意味が付与されたり、変質したりすることがあることをこの検討の過程で筆者はあらためて学んだ。思想というものが、純粹にひとつのものというよりも、時代や状況によって変化するものであるとすれば、またそうなることによってこそそれぞれの時代や社会に有用なものとなるとすれば、その例をコント思想のラテンアメリカにおける展開に多く見いだすことができるだろうし、思想の変質を頑なに拒んで守り通した例を「ブラジル実証主義者教会」に見いだすのである。そして後者の場合の社会的な有用性の判断は、まだこれから先のことのようと思われる。なぜならコントが目指した「新しい普遍性」は現在もなお研究するに値すると思われるのに、それは究明されたとはいいがたいようだからである。

【注】

- (1) Auguste Comte, Systeme de politique positive, Tome I (1851) (Paris: Au siège de la société positiviste, 1929), p. 58.
- (2) コント「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」（清水幾太郎編＜世界の名著＞36『コント スペンサー』中央公論社、昭和45年）108-109ページ。Auguste Comte, “Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société” (1821), Systeme de politique positive, Tome IV (1854) (Paris: Au siège de la société positiviste, 1929), en “Appendice général-Troisième partie”, p. 58.
- (3) コント「実証精神論」（清水幾太郎編＜世界の名著＞36『コント スペンサー』同上）206ページ。Auguste Comte, Discours sur l'Esprit posi-

- tif (1844) , Édition classique (Paris : Vrin, 1974) , pp.118-119.
- (4) ラテンアメリカにおける実証主義の展開として、もうひとつの代表例と考えられるのがメキシコである。筆者はだいぶ以前のことになるが、メキシコのポルフィリオ時代における自由主義と実証主義の共通性と対抗関係を論じたことがある。そこでは主としてレオポルド・セアの論を批判的に受けとめて、メキシコではヨーロッパ自由主義の流れが定着していたために、ガビノ・バレーダが実証主義をメキシコに紹介する際には、コントのモットー「愛、秩序、進歩」は「自由、秩序、進歩」と置き換えられたことにも言及した。三橋利光「メキシコ・ポルフィリオ期における自由主義と実証主義」(『ラテン・アメリカ論集』No.14. 1980年11月)1-12ページ参照。
- (5) Jeffrey D. Needell, A Tropical Belle Epoque — Elite Culture and Society in the Turn-of-the Century Rio de Janeiro <Cambridge Latin American Studies: 62> (Cambridge : Cambridge University Press, 1987) , pp.125-127.
- (6) 19世紀後半におけるブラジル中間階級の社会変動に対する役割に関しては、以下を参照。Cruz Costa, Panorama of the History in Brazil, Trans. Fred G. Sturm<Pan American Union> (Washington, D.C. : General Secretariat of Pan American Union, 1962) , pp.51-52/Rollie E. Popino, Brazil — the Land and People, Second ed. (New York : Oxford University Press, 1973) , p.217/Edgard Carone, A República velha. I : Instituições e classes sociais. 4a ed. (São Paulo : Difel, 1978) , p.177/Décio Saes, Classe média e política na primeira república brasileira (1889-1930) (Pétopolis : Vozes, 1975) /Paulo Sérgio Pinheiro, “Classes médias urbanas : Formação, natureza, intervenção na vida política” , in História geral da civilização brasileira III : O Brasil republicano. 2. Sociedade e instituições (1889-1930) , Ed. by Boris Fausto, 3a. ed. (São Paulo : Difel, 1985) , pp.7-37/E. Bradford Burns, A History of Brazzil, Second ed. (New York : Columbia University Press, 1980) , pp.240-242.
- (7) ロナルド・ヒルトン(三橋利光訳)「実証主義(ラテン・アメリカにおける)」(『西洋思想大事典』2、平凡社、1990年)342-345ページ。

(8) たとえばヴィオッティ・ダ・コスタはその諸要因を列挙し、その一つひとつにたいして詳細な分析を行った結果、結局のところ、帝政の崩壊と共和制の樹立は、諸力が結果して起こった、いわば時代の流れであったと解説する。

Emília Viotti da Costa, Da Monarquia à República: momentos decisivos (São Paulo: Editorial Grijalbo, 1977), pp. 296-326.

(9) João Cruz Costa, A History of Ideas in Brazil — The Development of Philosophy in Brazil, Trans. by Suzutte Macedo (Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1964), p. 119.

(10) Auguste Comte, Appel aux conservateurs (1855) in Euvres d'Auguste Comte, Tome XI (Paris: éditions anthropos, Réimpression anastaltique, 1970)

(11) Joseph L. Love, Rio Grande do Sul and Brazilian Regionalism, 1882-1930 (Stanford: Stanford University Press, 1971)

(12) R. de Monte Arraes, O Rio Grande do Sul e as suas Instituições Governamentais <Biblioteca do Pensamento Político Republicano> vol: 12 (Brasília: Editora Universidade de Brasília), p. 6.

(13) J. Love, Rio Grande do Sul...., p. 45.

(14) その告白の手紙は、現在でもリオにある「ブラジル実証主義者教会」の壁に掲げられている。

(15) J. Love, Rio Grande do Sul...., p. 36.

(16) これらの詳細な報告が、毎年「年次回覧」(circular anual)とともに遂次、教会からテーマごとに小冊子として発行されていた。筆者は以前、この年次回覧の各年毎の報告(1881年から1912年まで)を大雑把にまとめたことがある。三橋利光「《研究ノート》ブラジルにおけるオーギュスト・コント実証主義の受容と展開 I・II — 年次回覧に見るブラジル実証主義者教会の活動 [1881-98年] [1903-12年]」(『イベロアメリカ研究』通巻15号 [1986]・16号 [1987]) 各45-56ページ、54-68ページ。